韓国における日語日文学関連学会の現状と問題点

李　応寿
世宗大学校日語日文学科副教授

1．はじめに

ただ今ご紹介に預かりました世宗大学の李応寿でございます。この度は、国際日本文化研究センターの「コリアにおける日本研究の現在」という題の国際シンポジウムにお招きいただき、誠にありがとうございます。

さて、韓国では現在、今まで例を見ないほど、日本研究が盛んに行われています。それは、隣国との国際交流の必要性が高まってきた昨今の雰囲気の反映であるとともに、国の度重なる日本文化開放政策、それから、2002年のワールドカップ共同開催などに影響された面も少なくないと存じます。

このような情勢のなかで、今日は韓国国内の日本研究の学会、なかでも日語日文学関連学会の現在の状況を皆さんにご報告し、私なりの意見を述べさせていただくことに致したいと思います。

一言で日語日文学関連学会と言っても、すでに各大学の日本語関連学科が100近くにも及んでおりますので、それぞれの学科なりの、たとえばソウルでは韓国外国語大学、あるいは中央大学、漢陽大学などに結成されている大学単位の学会もあります。

そして、これらの大学単位の学会のなかには、定期的に論文集を出すなど、非常に活発な活動を見せているものもあります。従って、厳密に言えば、これらの各大学に設けられている日語日文学関連学会も含めてご報告申し上げなければいけないと思いますが、今日は時間の関係もあるので、ひとまず大学単位の学会は除くことにし、

いわゆる全国規模の学会をご紹介するに止めたいと存じます。

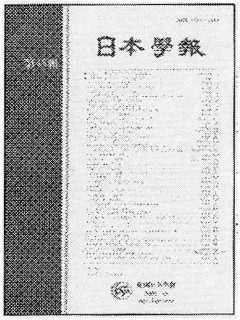
2．日語日文学関連学会の現状

それでは全国規模の学会のご紹介に入りますが、取り敢えず、設立の古い順序から見てみましょう。

2－1．韓国日本学会

まず「韓国日本学会」というのがあります。

これは1973年に創立された学会で、韓国における日本研究関連学会としては最も古いものであります。李栄九先生・宋敏先生など、1965年の韓日国交正常化以後、いち早く日本に留学した先覚者たちが中心になって結成されました。現在は、同徳女子大の李徳奉先生が15代目の会長を務めておられます。



この学会では、年２回全国大会を開くかたわら、その都度発表された論文をまとめて、学会誌を出しています。現在まで45輯が出ている『日本学報』がそれで、去年までは年２回出していましたが、今年からは、年４回に増やすことになりました。それは、学会に登録されている会員の数が1377名（2000年８月現在）にものぼっており、提出される論文の数が膨大な量になってしまったため、それに応じる形で取られた処置によるものです。

それから、「韓国日本学会」では、『日本学報』40輯までの全論文をCD-ROM（2枚）に収録したほか、42輯からのサイバー出版をも試みて、ホームページ（http://kaja.or.kr ）に原文と抄録を掲載し、誰でも容易く閲覧できるようにしました。また、50ページに及ぶ学

会の案内誌（KAJA Newsletter）も年2回発行しています。そればかりか、単行本として、1977年4月から1980年2月にかけて「日本文化叢書」（全8巻）を世に問うたのを始め、1989年には「日本思想叢書」（全7巻）を発行し、最近は「日本学研究叢書」（既刊9冊）を発行し続けています。

それでは引き続き、この「韓国日本学会」の特徴を考えてみましょう。この学会の一番大きな特徴は、傘下に小さい学会を持っているということです。学会の名前が「日本学会」であるだけに、その下に「日本語学会」・「日本文学会」だけではなく、「日語教育学会」・「日本教育学会」・「日本歴史文化学会」・「日本社会民俗学会」・「嶺南日本学会」といった七つもの専門別傘下学会を抱えています。いわゆる分会組織による日本学全般の専門化および学際化を図るネットワーク型学会を指向しているわけで、これらの傘下学会は、全国大会の合間に、それぞれ年2回ほど独自的な学会を開いています。

それから、最近その勢いを増しつつある国際化に対応する形で、「韓国日本学会」では、英語版の論文集（Japanology-International Edit）を出版することになりました。これは、韓国と日本だけを視野に入れるのではなく、いわば英語圏の世界各国に向けても情報を発信しようではないかという趣旨の下で進められたもので、今第1号が印刷に廻っている途中です。

この英語版に載せられる論文は、今までの『日本学報』に掲載された論文のなかで選び抜かれた、いわゆる優秀論文です。それは「韓国日本学会」では、去年から嘉泉吉大学の洪顕吉先生を委員長とする「褒賞委員会」を発足させ、この委員会で、各傘下学会で推薦された論文、単行本、その他の業績などを審査し、全国大会の場で褒賞する制度を設けましたが、この賞を受賞した論文を中心に英語版を作るからであります。

一方、このような国際化の雰囲気のなかで、去年の11月25日から26日の2日間、ソウルの同徳女子大学において、「日本語教育の新し

いパラダイム確立のための新構想－21世紀型総合的日本語教育における語学・文学・文化およびメディアのあり方」というテーマで、韓国では初めての日語日文学関連世界大会が開かれました。この大会は、日本の「日本語教育学会」と共同で開催したこともあって、日本から150人を越える学者が来韓したのを始め、アメリカ、中国、台湾、ヨーロッパからも大勢の学者が参加、それぞれの国の日本語教育の事情を報告するなど、盛大に行われました。

2－2. 韓国日語日文学会

次は「韓国日語日文学会」をご紹介しましょう。

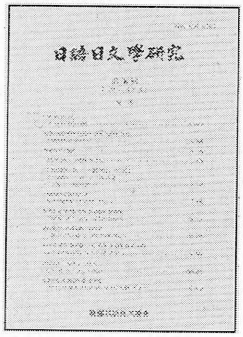
現在東国大学の姜錫元先生が会長をしておられるこの学会は、日語日文学関連学会としては2番目に古い歴史を持っています。1978年に設立されたこの学会は、当時韓国外国語大学の全基定先生・国際大学（今の西京大学）の許礎先生などが中心になって結成されました。私は大学院に在籍しながら全先生の助手をしていたので、師匠の苦労を隣で拝見し、事務などの手助けに勤しんだことを、今もありありと覚えています。

「韓国日本学会」が日本学全般を網羅する学会であるのに対し、「韓国日語日文学会」は語学と文学に集中する専門学会としての位置を確保しながら、良き意味での競争相手にもなり、その後、絶え間なく発展し続けてきました。その結果、現在は800人に及ぶ会員を確保しています。

今800名と会員数をご紹介しましたが、この数は、かなり実質的な数であるということを指摘しておかなければなりません。どこの学会もそうであるように、学会が発表する会員の数には、かなりの虚像が入っていると思います。しかしこの学会では最近、その虚像を無くすため、3年間会費を払っていない人を除名しました。要するに、「韓国日本学会」と「韓国日語日文学会」は表向きの会員の数には差が見られるものの、その規模の面においては、ほぼ同じクラスになっているということです。

それは「韓国学術振興財団」の評価からもうかがい知ることができます。韓国では最近学会および学会誌の評価作業を進めておりますが、それを担当しているのが「韓国学術振興財団」で、学術誌の評価がそもそもできるものなのかどうかについての賛否はさておき、この財団の評価結果を見てみますと、日語日文学関連学会としては、数多い学会のなかで、この二つの学会だけが肩を並べて名前を連ねています。

最後に「韓国日語日文学会」の学会誌についてご紹介しますと、この学会では、『日語日文学研究』という論文集を、年2回出しています。つい最近の2000年の冬に発行されたものが37輯ですが、36輯からは「語学篇」と「文学・日本学篇」を分冊し、同じ時期に2冊の本を同時出版する形を取っています。これは、学問の細分化および発行経費の節約という意味において、望ましい選択であったと、私には思われます。



2－3. その他の全国学会

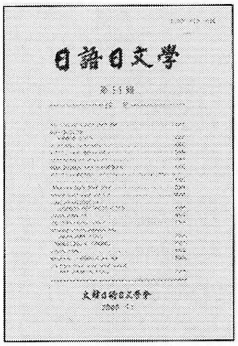
その他にも韓国には、数多くの全国規模の学会が存在します。一々ご説明してもきりがないので、まず＜表＞でその概略を示し、特記すべき事柄だけをご説明申し上げることにしましょう。

＜表＞　　日語日文学関連学会の現状　2001年2月3日現在

	学　会　名	会　長	創立年度	学会誌名	会員数
①	韓国日本学会	李徳奉	1973年	日本研究（年4回）	1377名（2000年8月）
②	韓国日語日文学会	姜錫元	1978年	日語日文学研究（年2回）	約800名
③	大韓日語日文学会	李権基	1994年	日語日文学（年2回）	約300名
④	日本語文学会	兪長玉	1995年	日本語文学（年2回）	約300名

⑤	韓国日本語文学会	許錫	1995年	日本語文学（年2回）	約300名
⑥	韓国日本文化学会	片茂鎮	1996年	日本文化学報（年2回）	約400名
⑦	韓国日本学協会	任重彬	2000年	日本文学研究（年2回）	約400名
⑧	韓国日本語学会	尹幸舜	1999年	日本語学研究（年2回）	約250名

2－3－1. 大韓日語日文学会



①番と②番はすでにご説明申し上げましたので、③番の「大韓日語日文学会」から見ていきたいと思います。

現在慶星大学の李権基先生が会長をしておられる「大韓日語日文学会」（The Japanese Language and Literature Association of DAEHAN＝JALALIDA）は、元は釜山地域の日本語関連の教授たちの勉強会でありました。その「釜山日語研究会」が1991年2月23日「釜山日語日文学会」に発展し、引き続き1994年7月8日には「大韓日語日文学会」と改称して、全国学会として新しくスタートを切ったわけです。現在までの学術研究発表会は18回、論文集は14輯まで出しています。

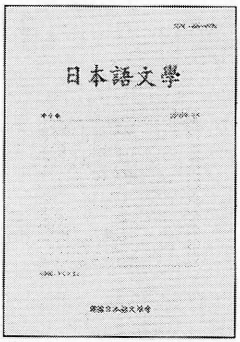
2－3－2. 日本語文学会

③番の「大韓日語日文学会」が釜山および慶尚南道を中心にした学会であるとするならば、④番の「日本語文学会」は、大邱および慶尚北道を本拠地とした学会であることが言えます。それは、1992年の8月21日大邱にある啓明大学で発足した「啓明日語日文学研究会」がその母胎になったからで、その後この研究

会は、「日語日文日本学研究会」（1994.8.5）に改名した後、1995年8月19日からは現在の「日本語文学会」を名乗っています。

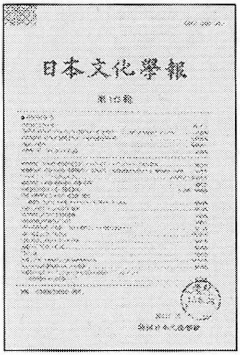
そして、1998年の夏に初めての国際学術大会を開いたのを始め、翌年の1999年の夏には「日本芸能学会」との共催で国際学術大会を開くなど、日進月歩国際化に邁進しています。その証左が理事の配分にも現れているわけで、この学会は、小林和美大阪教育大学教授を始めとする4人の海外理事を持っており、よって、積極的に国際交流を図っています。

2－3－3. 韓国日本語文学会



現在木浦大学の許錫先生が会長をしておられる⑤番の「韓国日本語文学会」(The Japanese Language and Literature Association of KOREA＝JLAK）は、1995年に創立して以来、主に全羅道地方の学者たちを中心に活動してきました。最近は、「韓国教育学術情報院」との学術情報協約を進めるなど、その活動の範囲を広げつつあります。学会誌は、第9輯が2000年9月に出ています。

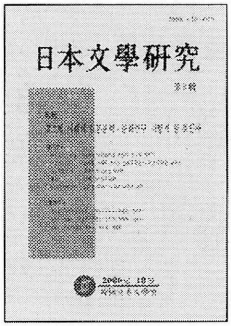
2－3－4. 韓国日本文化学会



1996年主に忠清道地方の学者たちを中心に結成され、現在は檀国大学の片茂鎮先生が会長をしておられる⑥番の「韓国日本文化学会」は、他の学会とは違って、「文化」に重点を置いた学会であることが言えます。それから国際交流の面では、日本の「日本比較文化学会」（1979年6月に結成、会員約600名）および「表現学会」（1963年に結成、会員約500名）と学術交流協定を結んでおり、自らも海外理事、

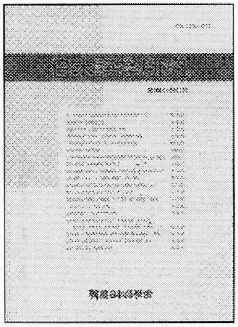
そして海外支部（関西支部・関東支部・中部支部・中国支部）を持っています。実際のところ、＜表＞に載っている400名の会員のうち、約150名は日本滞在の会員であります。

2－3－5. 韓国日本学協会



1999年に「韓国日本文学会」として発足した⑦番の「韓国日本学協会」は、2000年に入って、その名称を変えました。これについて学会では、そもそも「文学」の概念を文学・言語・歴史・社会・政治・文化などを含む幅広い意味として捉えていたのが、いまや芸術の一つのジャンルとしてしか解釈されない傾向が広まってきたため、名称を変更したと説明しています。ともあれ、この学会の活動は活発で、褒賞制度を持っているのはもちろん、「日本研究叢書」の刊行にも乗り出しています。

2－3－6. 韓国日本語学会



現在南ハンバッ大学の尹幸舜先生が会長をしておられる⑧番の「韓国日本語学会」（The Japanese Language Association of Korea＝JLAK）も、⑦番と同じく比較的新しい学会です。1999年9月18日に発足したこの学会は、「日本語（日本語学・日本語教育学・その他日本語関連分野）に関する理論的研究と、その応用を目的とする」という設立趣旨（会則第2条）にも明らかなように、専ら日本語学を探究する専門学会であることが言えます。

3．問題点と今後の提言

以上で、韓国における日語日文学関連学会の全貌を見てきました。この辺で、一応それをまとめてみたいと思いますが、まず目につく特徴として、＜表＞でも明らかなように、90年代、それも後半に入ってから、学会の数が急に増えてきたことが挙げられます。

学会の数が増えたということは、とりもなおさず、研究者の数が増えたことを意味するだろうと思います。実際、韓国の大学のなかで、現に日本語・日本文学を教える学科が設置されているのは、4年制大学の場合、96の大学にも及んでいます。これは、全体の184の大学の半分を越える数で、基礎学問ではなく、外国語・外国文学だけを取り扱う学科としては、膨大な数であると言えます。

それに伴って、国の大学自律化政策とも相まって、既存の大学院においても修士課程・博士課程が日に日に増えつつあります。2000年現在、修士課程が設置されている大学が31カ所、博士課程が設置されている大学が14カ所にのぼっているので、学会の数が増えるのも、ある意味では当たり前な現象かもしれません。

またその上、最近、各大学が専任教員に対する研究業績の要求を、急に増やしてきました。その結果、学会の数が増え、多数の、いわゆる全国規模の学会誌が発行される運びとなったわけです。

そして、このような現状を反映してか、一方では、論文の質が落ちるのを防ぐため、たとえば「韓国学術振興財団」による学術誌評価作業などが行われてはいるものの、韓国は現在、まさに学会の戦国時代・百家争鳴時代を迎えている、あるいは迎えつつあると言っていいだろうと思います。

このような現状を踏まえたうえで、もう一度、＜表＞のなかの諸学会の名前をご覧いただきたいと思います。学会の名前があまりにも似たり寄ったりで、非常に読み紛らわしいですね。それは、学会誌に載せる論文の専門性よりは、全国規模の学会であることを標榜したがる、あるいはそうせざるを得ない状況に、大半の学会が置か

れているからにほかなりません。

なお、このような状況の下では、大学の専任教員はともかく、特に大学院生の場合は、2重3重の苦労を強いられるのが現実です。というのも、学会が地縁あるいは学派で結ばれている今の状況では、先輩あるいは指導教官の薦めがあるたびに、あちらこちらの学会に加入しなければならないからで、それが現に、先ほども申し上げたような、学会の会員数の虚像を生み出しています。

現在の韓国の日語日文学関連学会を率いている主な勢力は、40代後半から50代前半の若手の学者たちです。それは、日本植民地時代に日本語を身につけた、いわゆる日本語第1世代のほとんどが65歳を越え、定年退職になったからで、その後を、韓日国交正常化以後の留学世代が埋めるようになりました。

いわゆる長老がいなくなった後に、新鋭の学者たちによる戦国時代・百家争鳴の時代が訪れるのは、ある意味で当たり前なことかもしれません。しかし、このような百家争鳴を、どのようにして、学問の花咲く百花繚乱の時代に変えていくのかが大事ではないでしょうか。

これについて、敢えて私の意見を述べさせていただくなら、似たり寄ったりの学会が並列するよりは、もっと細分化された学会、たとえば語学と文学の区別はもちろん、文学のなかでも時代別あるいはジャンル別に分化された学会の数を増やしていくのが、学問の多様化を進める見地からも望ましい現象であり、将来の学問の発展にもつながる一つの方向になるのではなかろうかと存じております。

ご清聴ありがとうございました。